

# 総合問題 (180分)

2022年2月25日

## 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は片面印刷で10ページあります。  
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答用紙は5枚です。解答はすべて解答用紙の所定の場所に記入しなさい。
- 4 解答用紙とは別に、下書用紙が2枚あります。必要に応じて自由に使用しなさい。
- 5 受験番号は、すべての解答用紙の所定の欄(2か所)に必ず記入しなさい。
- 6 配付した解答用紙は、試験終了後にすべて回収します。
- 7 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰りなさい。

このページは空白である。

## 第1問

以下の文章は大石始の『盆踊りの戦後史―「ふるさと」の喪失と創造』からの抜粋である。文章をよく読んであとの問いに答えなさい。

近年の日本は、人口減と少子高齢化による人手不足を背景に、外国人労働者を積極的に受け入れてきた。2015年には外国人移住者の流入数が前年比約5万5,000人増の約39万人を記録。前年5位の韓国を抜き、ドイツ、アメリカ、イギリスに次ぐ世界第4位の移民大国ともなった。

2019年6月の段階における在留外国人数は、法務省の調査によると282万人強。2019年4月には外国人労働者の受け入れを拡大することを目的とする入管法改正案が施行され、5年間でさらに約34万5,000人の受け入れ増を見込んでいるという。

そうしたなかで外国人住人の占める割合が急増しているのが、各地の住宅団地だ。大島隆『芝園<sup>しばぞの</sup>団地に住んでいます』によると、かつて日本住宅公団（現在のUR都市機構）の賃貸住宅には日本人しか入居できなかったが、1980年には永住資格を持つ外国人の入居が可能となり、1992年からは中長期の在留資格を持つ外国人の入居が認められるようになった。

外国人が賃貸住宅に入居する場合、保証人の存在が高いハードルとなるが、URの住宅団地は一定の収入があることを証明できれば保証人がいなくても入居可能である。そのため、90年代以降、そうした団地の一部で外国人が急増し、多国籍化が進行したという。

そして、そんな多国籍団地でも盆踊りや夏祭りが開催されてきた。移民大国となった日本における盆踊りの役割とはなんだろうか。先に挙げた大島隆の著作を紐解きながら、芝園団地（埼玉県川口市）の事例を取り上げてみたい。

芝園団地では1978年から住民の入居が始まった。都心までのアクセスもいいことから、完成当初は入居にあたって抽選が行われるほどの人気だったというが、80年代に入ると入居数は減少。次第に住民の高齢化が進行していった。完成当時に入居した第一世代は現在、すでに70歳以上となっている。

この団地には現在、2,500世帯5,000人弱の人々が住んでおり、その半数を外国人住民が占めている。中心となるのは20代から30代の若い中国人だ。IT技術者が多くを占めるが、孫の子守のために中国から一時的に日本にやってくる高齢者もいるという。

大島によると、芝園団地の場合、中国人が増加したからといって犯罪件数が増えたわけではなかったという。「多国籍化が進むと団地の治安が悪化する」なんてことがよくいわれるが、少なくとも芝園団地ではそんなことはなかったのだ。

ただし、住民間の目立ったトラブルがない現在においても、日本人住民と中国人住民の間には断絶があるようだ。そもそも高齢者中心の日本人世帯と単身者も多い20～30代中心の中国人世帯とでは、世代がだいぶ違う。これだけ世代が違えば、日本人同士であっても多少の断絶は起こりうるだろう。

団地内には中国人営業の飲食店や商店もあり、中国からやってきた人々は団地内の日本人と一切関わらずとも生活を送ってしまうということも大きい。加えて中国人住民はある程度の期間で引っ越してしまうケースが多いため、地域との結びつきを作ることに必ずしも積極的ではないという。

そのことを証明しているのが、自治会に加入している世帯の少なさだ。団地が完成した当初は住民のほとんどが自治会に入っていたが、大島によると、2017年の段階で自治会に入っている世帯は470世帯。そのうち外国人はわずか23世帯に過ぎないという。そもそも中国には自治会の風習がないというのだから、関心が低いのも致し方ないのだろう。

その一方で、芝園団地では共生のためのさまざまな取り組みが進められてきた。

現在、敷地内の掲示板に張り出される注意書きは日本語と中国語が併記されており、以前は問題となっていたゴミ出しの分別もかなり改善されたという。2013年からは日中の住民の交流を目的とする「ニーハオ芝園フェスタ」が商店会の主催によって開催。2015年には、このイベントに参加した大学生を中心とするボランティア団体「芝園かけはしプロジェクト」が立ち上げられ、定期的に交流イベントを開催している。

この団地最大のイベントは自治会主催の「ふるさと祭り」だ。住民の数も多かった1980年代のふるさと祭りは大変な賑わいだったという。大きな櫓<sup>うし</sup>が立ち、その周りは第二次ベビーブーム世代の子供たちが取り囲んだ。時代はアニソン音頭全盛期である。その盛り上がりはさぞかし凄まじかったことだろう。

だが、高齢化の影響は賑やかだったふるさと祭りにも少しずつ影を落としていく。そもそも大きな櫓を組む作業は高齢者には重労働だ。自治会の人数が減少すると同時に祭りのスタッフも少なくなり、準備や後片付けの負担は数少ない高齢のスタッフにのしかかった。自治会では毎年祭りの終了が話し合われるが、それぞれに祭りに対して思い入れがあるため話がまとまらない。結局、2019年にはふるさと祭りの目玉であった大きな櫓が解体され、小さな櫓を隣のマンションから借りてくることでひとまず継続が決定された。

祭りには中国人住民も遊びにくるが、彼らが祭りの準備や撤収に関わることは少ない。大島によると「ふるさと祭りは、日本人住民が準備をして中国人住民が楽しむものに変わりつつあった」そうで、そこに「もやもや感」を抱える日本人住民も少なくないという。

そして、その「もやもや感」の背景にあるのが、「自分たちの場所に中国人が入り込んできたことによって、少数派となった自分たちがないがしろにされている」という日本人住民の思いである。大島はそこにアメリカ中西部や南部におけるトランプ支持層の拡大を支えたもの、すなわち「自分たちの取り分を移民たちが奪っている」という<sup>(a)</sup>（ ）を見ている。

芝園団地に限ったことではないが、日本でも外国人労働者が日に日に増えていく現状に対し、不満や不安を抱える人々は少なくない。そこにはっきりとした対立があるわけではないが、確かな分断がある。<sup>(b)</sup> そうした分断状態において、盆踊りや祭りはいったい何ができるのだろうか？——この問いもまた、現代の盆踊りにおける重要なテーマのひとつといえる。大島もまた、この

ように自問している。

そもそも私たちはなぜ、祭りをするのだろうか。

地域のため、子供たちのため、一緒に何かをすること自体が楽しいから……。そこにはさまざまな理由があるが、すべてに通じる前提がある。単に「住んでいる」だけではない、「私たちの団地」という帰属意識であり、その中でのつながりだ。

(大島隆『芝園団地に住んでいます』)

大島のいう「私たちの団地という帰属意識」とは、「ふるさと」という概念とも一致する。異なる出自を持つ住民のなかに共通する「ふるさと」を育むこと。それは決して簡単なことではないが、今や世界第4位の移民大国となった日本という国は、海外にルーツを持つ人々や海外からの移住者も含む新たな「ふるさと」のかたちを考える必要があるのだ。

そのなかでは盆踊りや祭りの形態自体も変容を迫られていくだろう。芝園団地の例を考えてみれば分かりやすいが、ITエンジニアをやっている20代の中国人にとっては、「炭坑節」や「東京音頭」のような100年近く前の日本の曲は少々ハードルが高い。では、日本人・中国人住民が共に参加したくなるような祭りとはどんなものだろうか？それもまたひとつの課題といえる。

なお、芝園団地では防災訓練の際、日本と中国の住民が協力する場面が見られるほか、テニスなどのスポーツクラブに少数の中国人住民も参加しているという。そのように協力し合って地域活動を行い、少しずつ「私たちの場所」という意識を育てていくことでしかコミュニティーの分断を超える方法はない。そして、そこにはまだ盆踊りや祭りの役割が残されているはずだ。

関東近郊の多国籍団地のなかでも芝園団地と並んでメディアに取り上げられる機会が多いのが、神奈川県横浜市泉区と大和市にまたがる県最大の県営住宅、いちよう団地だ。

1971年に入居が始まったこの団地が多国籍化したのは80年代以降である。1980年2月、団地からもほど近い神奈川県大和市南林間<sup>みなみりんかん</sup>に大和市定住促進センターが開設され、同センターで南ベトナム共和国崩壊によって難民となったインドシナの人々（ベトナム人、ラオス人、カンボジア人）を受け入れた。その後、この施設を退所した人々の一部がいちよう団地に入居し、そうした入居者が親類縁者を本国から呼び寄せたことで、さらに外国人住民が増加した。また、1972年の日中国交正常化以降、日本に帰国した中国残留孤児とその家族の入居も続いた。現在では全住民のうち約2割を、外国人および他国にルーツを持つ人々と中国残留孤児の家族が占める。一番多いのは中国系で、ベトナム人とカンボジア人が続く。

同じ多国籍団地といっても、芝園団地といちよう団地の住民構成はかなり異なる。日本人住民の多くが高齢者である点是不変だが、20～30代の中国人が多い芝園団地に対し、いちよう団地は中国残留孤児やその子孫が多く、中国系住民のあいだでも高齢化が進んでいる。また、いちよう団地は入居にあたっての所得制限があり、住民は低所得者のみである。若い外国人住民の多くは神奈川県内の工場で働く労働者で、芝園団地のようにIT産業に従事する若者は皆無だ。

芝園団地と大きく異なるのは、いちょう団地には日本人住民・外国人住民ともに子育て世代が一定数住んでおり、子供を通じたコミュニケーションがそれなりに行われているという点だ。この団地に住んでいる寺田さんご夫妻も娘さんのクラスメイトである外国人家庭の誕生日会に招かれるなど、決して頻繁ではないものの交流があるという。

また、いちょう団地には日本生まれの二世・三世もいる。彼らの一部は母国語よりも日本語のほうが堪能であり、親がほとんど日本語を話せない場合、親子のあいだでコミュニケーションを取りにくくなるケースもある。そのため、いちょう団地ではそうした二世・三世に母国語を教える語学講座も行われているという。いちょう団地の住民はそのように「外国人住民」とひとくくりにできないほど多様で、その点もまた⑥「日本人住民／中国人住民」という明確な図式がある芝園団地とは異なる。また、いちょう団地ではそのように多様な住民の共生のため、多文化まちづくり工房や自治会が主導する交流会が以前から行われており、そうした地道な活動がコミュニティーの土台となっている。

そんないちょう団地が1年で一番盛り上がるのが、毎年10月に行われるいちょう団地祭りだ。主催はいちょう団地連合自治会。多国籍団地らしいさまざまな演目が2日間にわたって繰り広げられる。

初日はカラオケ大会や御陣乗太鼓<sup>ごじんじょうだいこ</sup>、歌謡ショウが披露されるほか、大人神輿<sup>お大人</sup>の練り歩きも。日が暮れるとあちこちでゲリラ的にダンスタイムが始まるのもこの祭りの特徴だ。ポータブルのスピーカーでカンボジアのダンス音楽を鳴らし、気ままに踊る光景はさながらホーム・パーティーのようで、時にはその輪に通りすがりの日本人が加わることもある。

「多文化共生交流会」と銘打った2日目は、アジアのさまざまな国の踊りや歌が披露される。中国獅子舞が賑やかに舞い、カンボジアの伝統舞踊であるロアム・ボンでは伝統衣装を着たカンボジアの男女が優雅に身体を揺らす。この日は「炭坑節」をみんなで踊る盆踊りタイムもある。踊りの輪のなかにカンボジア人が混ざったり、カンボジアのダンスに日本人が飛び入りしたりと、踊りを通して日本／カンボジアのコミュニティーが少しだけ混ざり合う。

いちょう団地祭りのもうひとつの目玉は、通りを埋め尽くす国際色豊かな屋台だ。ベトナム料理やカンボジア料理、中国料理に加え、いちょう団地連合自治会による焼きそばやたこ焼きなどお馴染の屋台も並ぶ。

祭りの高揚感のなかでは、普段できなかった話もできる——これもまた、祭りの持つ力のひとつだろう。普段は日本人と中国人、ベトナム人のコミュニティーははっきりと分かれているが、団地祭りの際にはそれが少しだけ混ざり合うのだ。

なお、いちょう団地では入居の際、自治会への加入が条件づけられており、外国人住民も基本的には自治会に入っている。外国人が自治会の役員を務めることもあるそうで、そこもまた中国人住民のほとんどが自治会に入っていない芝園団地と異なるところだ。自治会主催の年間行事としては、いちょう団地祭りのほかに大掃除と防災訓練があり、この日も国を超えて参加することになっている。

住人同士は年に数回の年間行事で顔を合わせる程度に過ぎないが、こうした行事を通じて顔が見える関係が形成されていることは大きい。そのこともあってか、(d) 芝園団地の日本人住民が抱えているような「もやもや感」は、いちよう団地の住民はさほど持っていないようにも見える。

出典：大石始『盆踊りの戦後史―「ふるさと」の喪失と創造』（筑摩選書，2020年）より抜粋。必要に応じて表現等を変えている。

問1 本文中の(a) ( )にもっともよくあてはまるものを、下記から選び、番号で答えなさい。

- ① 多元主義の権化<sup>ごんげ</sup>
- ② 新自由主義の終焉<sup>しゅうえん</sup>
- ③ 排外主義の萌芽
- ④ 排外主義の真髄
- ⑤ 縁故主義の末路

問2 下線部(b) そうした分断状態において、盆踊りや祭りはいったい何ができるのだろうか？という問いへの答えを、本文にそくして50字以内で述べなさい。

問3 下線部(c) 「日本人住民／中国人住民」という明確な図式が、いちよう団地では生じない理由は何か。本文にそくして3点あげなさい。

問4 下線部(d) 芝園団地の日本人住民が抱えているような「もやもや感」は、いちよう団地の住民はさほど持っていないようにも見えるとあるのはなぜなのか。2つの団地の祭りのあり方に着目して、100字以内で答えなさい。

問5 筆者は、コミュニティーの分断を超える方法として、盆踊りや祭りの役割を重視している。あなたの日々の暮らしの中で分断があると思われる事例をあげ、その分断は何によって生じているのかを指摘し、その分断を解消するためにはどのような方法があるのか、400字以内で論じなさい。

## 第2問

次の英文を読んで、あとの問いに答えなさい。（本文中の\*の箇所は英文のあとに注があることを示している。）

著作権保護の観点から、公開していません。

著作権保護の観点から、公開していません。

(Adapted from “What makes someone bilingual? There’s no easy answer”, June 10, 2021:  
<https://theconversation.com>)

注 adolescence 思春期 mental lexicon 心的辞書 *L'Auberge Espagnole* 『スパニッシュ・アパートメント』 invulnerable もろくない puberty 思春期

問1 本文中に挙げられている bilingualism の定義について、具体例とともに4つ、日本語で説明しなさい。

問2 本文において、bilingualism は年齢により3つに分類されると述べられている。まず、それらの分類を英語で示し、それぞれの分類についてどのような説明がなされているか日本語で述べなさい。

問3 下線部(1)について、2つのパターンを本文中の例を用いて、日本語で説明しなさい。

問4 The author talks about bilingualism. Do you think it is important for people in Japan to be able to use two or more languages? Write your answer in your own words in English in the space provided on the answer sheet. Be sure to include specific details or examples to support your ideas.